

令和 2 年度 卒塾式のご報告 2021.3.13 (土)



令和 2 年度 卒塾式式辞
松下政経塾 塾長 **佐野 尚見**

皆さんおはようございます。
本来であれば、この講堂で、多くの皆様のご祝辞や励ましのお言葉を頂きながら、記念すべき卒塾式を執り行うはずでありました。

先程、「根源の社」にて、塾主に対し本日の式典についてのご報告をしてまいりました。
“コロナはまだ収まらず。このような形の卒塾式とさせていただきます。塾生も職員も残念至極であります。”

そうしましたら、塾主の声が聞こえてきました。「これもまた良し！大いに結構じゃないか。38 期の諸君は、幸せ者だ。最後まで万事研修で頑張ってくれたんだな。」と……。

素直に現実を受け入れ、その中から常に新しい商品や仕組みや、「物の見方・考え方」を生みだしてこられた、塾主ならではのお言葉だったと思います。
果たして、本当に塾主のお声が聞こえたか否か、信じるか、信じないかは、あなた次第です……。

松下理事長からもメッセージが届いております。「厳しい環境からの船出ではありますが、地域の為、国の為、世の為、人の為に自ら立てた志を果たしていただくことを期待しています。」



さて、改めて 38 期の皆さん、卒塾おめでとうございます。

4 年前、皆さんは、文字通り多様性に富んだ“志”を鞆に詰め、目を輝かせて入塾してこられました。
それからの 4 年間……皆さんは、指導者としての基本的な素養を身に付けながら、敢えて遠回りをし、敢えて難しい道を選び、敢えて厳しい環境に身を置いて研修を続けてきました。



自ら立てた「かくあるべしという仮説」が、国内、海外の多くの現場で「異なった見解」を求められ、そのギャップに戸惑いを覚えたことは一度や二度ではなかったと思います。

一方同じ“志”をもって頑張っている仲間や組織に出会い「意」を強くした体験もあったはず
です。

本日は、皆さんに「縁を大切に」と「断を下す」の 2 点についてお伝え
したいと思います。

皆さんが体験したこれらの出会いこそ、貴重な“縁”であり、皆さんの“見えざる資産”となって身
についているはずです。

かつて松下政経塾の相談役を務め、ご指導頂いた、安岡正篤（まさひろ）先生は、塾生に
対して、“縁”の大切さ、“縁”の不思議な力について述べておられます。

松下塾主もまた、生涯“縁”を大切にされた方でありました。





私のささやかな人生経験においても、幾度が“縁”を実感し、相手に感謝し、時には感謝されたこともありました。中には、自分の意に添わなかった“縁”もありました。

しかし、後になって考えてみますと、意に添わなかった“縁”ほど、本質を突かれたものが多く、「自分の未熟さ故に、意に添わなかった“縁”であった」と、気づかされたことも多々あったように思います。

むしろ大切にしなければならぬ“縁”は、このような意に添わなかった“縁”かもしれない。

いずれにしても“縁は縁”であり、卒塾後も、せっかく手にした“縁”を大切に育んでいっていただきたいと思います。

皆さんは、いよいよ明日から、それぞれの道を歩むことになります。

人は、人生において、何度か大きな“決断”しなければならない時があります。

少々振りかぶった表現ではありますが、その“決断”こそ、松下政経塾で学んだ者にとって宿命的なものであります。そしてそれは、皆さんが社会に求めているものではなく、社会が皆さんに求めている内容のものでなくてはなりません。

皆さんの先輩たちもまた、自らを信じて“決断”し、社会に飛び出していきました。後ほどビデオメッセージを頂く三人の先輩もまた然りであります。

彼らは、人から与えられた方程式を解くのではなく、謂わば公式のないところで自ら方程式を創り、自ら解いていきました。そこに、楽しみと喜びを見出だして頑張っておられます。

塾主も“決断”について、皆さんが毎朝読み続けてきた「道をひらく」の中でこのように述べておられます。

『進むもよし、とどまるもよし、要はまず“決断”を下すことである。それが最善の道であるかは、神ならぬ身、計り知れないものがあるにせよ、“決断”を下さないことが、自他共に好ましくないことは明らかである』

38 期の皆さんの卒塾にあたり、2 つのキーワード

*「“縁”を大切に」

*「断を下す」・・・を贈り、祝辞とさせていただきます。

最後になりましたが皆さんがこの 4 年間、お世話になった多くの先生方に対して、感謝の念を忘れないで頂きたい。皆さんのご活躍を心からお祈り申し上げます。

本日は、私にとりましても、大変思い出深い卒塾式になると思います。



入場前の 38 期生。このマスク姿が懐かしく思い出される日が早く来ることを願って、...

新型コロナウイルス感染症対策のため、昨年に引き続き塾生・職員のみでの開催となりました。決意を胸に塾を巣立つ5名の卒塾生達に役員、塾員の皆様からビデオメッセージを頂きました。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



来賓メッセージ

曾根泰教 様

(評議員／慶応義塾大学名誉教授)

大変おめでとうございます。ひとこと卒塾に対するメッセージを申し上げます。この1年コロナで大変だった。あるいは、自分の計画も予定どおりに進まない。様々な困難に直面したと思います。しかしながら、松下政経塾そのものが、大変「密」なる環境で教育・研究・活動を行っている、コンタクトベースの世界だったというふうに、改めて懐かしと思うんではないかと思います。

このような、予定どおりに進まないときに、それをプランAとすれば、プランBなり、プランCなりを用意しておく必要性も感じたと思います。よく、ピンチをチャンスに変える。あるいは、転んでもただ起きないというようなことが言われますけれども。この危機は、われわれが今後、文明論的に考えて、世界が進んでいく方向を考え直す、あるいは、改めて考える良いチャンスだったと思います。

たとえば、グローバル化ですけれども、コロナというのはグローバルに感染が広まる現象です。しかしながら、グローバルな解決をめざすよりも、各国はまず、主権国家に戻って、古典的な公衆衛生の手法である隔離とか、あるいは閉鎖とか、移動制限、あるいは検疫という手法を行いました。

じゃあ、グローバル化は今後ずっと続くんだろうか、これが1つの課題です。もう1つはデジタルの世界、デジタルイゼーションですけれども。国内に目を転じますと、このコロナで政府、内閣といていいでしょう、内閣と都道府県、あるいは市町村との関係は、紙の上ではうまくいってはいはずなんですが、実行に移すときには齟齬がいくつか生まれました。中央・地方との関係を、われわれ「分権」という手法で解決しようとしてきましたけれども、コロナはそれに対して再考を迫ったと思います。

たとえば、インターネットの初期のころ、われわれ「自律・分散・協調」という概念を主張しました。コンピュータの世界でいえば、メインフレーム型、メインフレームに端末がぶら下がるっていうのは、もう中央集権の象徴です。それに対して、パソコン、ワークステーションをネットワークでつなぎ、それを世界とリンクさせるというインターネットの世界は、まさしく、この分権・分散の発想と一致していたわけです。

しかしながら現在、デジタル化もクラウドを使う時代になりました。そうすると、各自治体がアプリを独自に開発するの、相互につながらないということも起こってきました。そうしますと、現在のデジタル化というのは、いったいどういう方向に進んだらいいのか。クラウド的発想を取り込むのか、これは分権概念とも関係する大変おもしろい現象です。グローバル化、デジタル化とクラウド化を申し上げましたけれども、皆さんがこれから進む世界、これから直面する世界の1つの先駆けの現象だと思っています。

コロナが突きつけた課題を解決していくというのは、一種の宿題になります。卒塾に際しても課題を課すというのは、松下政経塾の役割でもあるし、あるいは特徴でもあります。皆さん、これから解決していくことを、常日頃考えていただきたいと思います。改めて、卒塾に際しまして、おめでとうを申し上げます。



塾員メッセージ

松沢 成文

(参議院議員／第3期)



第38期生の卒塾生の皆さん、このたびは卒塾おめでとうございます。私は3期生で、現在、参議院議員を務めております松沢成文です。コロナ禍の中で、直接皆さんにお祝いを届けるのではなくて、こうしたオンラインになってしまいましたが、心からお祝いと激励のメッセージを贈りたいと思います。

皆さんご承知のとおり、いま大きな社会変革の真っ只中だと思います。アナログからデジタルへ。あるいは、ナショナリズムからローカリズム、グローバリズムに広がっています。政治体制でいえば、中央集権体制から地方分権体制。こんな大きな社会変化の中で、皆さんはこれから現場に出て改革を進めていかなければなりません。

企業にしろ、あるいは政党にしろ、いろんな団体にしろ、市民運動にしろ、組織を活性化させる。いまでいうガバナンスをしっかりとって組織運営するには、私はいくつかの要諦があると思っています。

1つはリーダーシップです。こういう方向で行こうと、引っ張るリーダーがいなければ、組織は動いていきません。しかし、それと同時に大切なのはチームワークです。みんなで一緒に協力してやっという。この動きもなければ、組織っていうのは大きな変革していかないんですね。

ただ、気をつけなきゃいけないのは、リーダーシップ、リーダーシップと、こればかり考えていると、政治でいうと、だんだん独裁政治になっていくんですね。その反面、とにかくみんなで話し合い、話し合い。このチームワークばかりに気を取られると、これは衆愚政治になってしまうんです。つまり、活力のある組織をつくっていくため、そのガバナンスには、リーダーシップとチームワークの両立が必要だと思います。私は長い経験の中から、それを学び続けているんだと思います。

さあ、皆さんは、これから大きな社会変革の中で、現場での改革に挑戦していくわけです。どうか自分自身がリーダーシップをしっかりとれているのか。と、同時に、チームワークをしっかりとつくり出しているのか、この2つを両立できるようなリーダーとなって、新しい社会をつくって行ってほしいなと、心から願っております。

政経塾で学んだ松下幸之助塾主の理念を、しっかりと思い起しながら、今後現場で切磋琢磨しながら頑張っていたいただければと、心から願っているところです。皆様の前途を祝し、お祝いの言葉といたします。本日はおめでとうございます。



村井 嘉浩

(宮城県知事／第13期)



38期生の皆さん卒塾おめでとうございます。

26年前、皆さんと同じように卒塾式に参加した時のことを思い出しております。

皆さんご存知の通り、松下政経塾は松下幸之助塾主がお創りになった塾であり、塾主の思想哲学を学ぶ場であります。

在塾中、いろいろな研修に励まれたと思いますが、研修で得た最新の知識も、いずれは時間と共に時代遅れと言われるようになり色褪せます。

しかし、塾主の思想・哲学は不変であり、きっとこれから皆さんが生きていく中で大きな示唆を与えてくれることが度々あると思います。

15 年前、私が知事に就任して半年経った頃に、私の自衛官時代に大変お世話になった、最も尊敬する元上司から 3 冊の本が送られてきました。

添えられていた手紙には、次のように書かれていました。「座右の書として今まで持ち続けていた 3 冊の愛読書をお届けします。大変でしょうが、最後の決断は長の長たる者がしなければなりません。責任は全て指揮官にあり、この 3 冊は、長の長たる者の資質、条件が良く出ています。私自身、この 3 冊には色々な場面で助けられました。限られた時間、色々やるべき仕事は山ほどある。その中であって「This is Murai」、自分自身の原点、立場を見失わないよう努力してください。」このように書かれていました。

後で知ったことですが、その元上司はその時すでにガンに侵され、余命が限られていたそうです。

送られてきた本は何度も読み返した跡がある薄汚れた本でしたが、座右の書を奥様や子供ではなく私に引き継いでほしいという想いが伝わってきました。私の宝物の一つになったことは言うまでもありません。

その 3 冊の本の中の 1 冊に塾主が書かれた「指導者の条件」という本が入っていました。

PHP の研究員と一緒に研究し、102 の事例から将来指導者になろうとする人々に指導者の条件を教えてくれております。

時間の関係で本日はその中の一つ「独立心」という部分が私の復興政策に与えた影響をお話したいと思います。

塾主はこの本の中で、「石油危機の時に、日本の国が政府も企業も一般国民も国をあげてうろたえ、非常な混乱を招いたのは、お互いの間にいつの間にか自主独立の気風が薄れ、依存心が高まってきたからに他ならない。それは、隣国の中国が自主独立、自力更生の国是を掲げ、未だ貧しいとはいえ力強い着実な歩みをしているのといささか対照的である。」と仰っています。数十年経ち、貧しかった中国がアメリカに伍した力をつけたことから塾主の見立てが正しかったことがわかります。

更に塾主は次のように仰っています。「指導者はまず、自ら自主独立の精神を養わなければならない。それと同時に、人々にもその独立心を植え付けていかななくてはならない。いかに指導者一人が自主性を持っても、人々がいたずらにその指導力に依存していたのではいけない。独立心なき者が何千人、何万人集まったとて、それはいわゆる烏合の衆に他ならない。

独立心の涵養こそ、その会社、その団体、その国家の盛衰を左右する重大なカギであることを指導者は知らなくてはならない。」

東日本大震災の直後、眠れぬ夜、知事室でこの部分を読み返しました。被災者に対して可哀想だと寄り添うことも大切だが、それ以上に被災者に他人の力に頼るばかりでなく、自分の足で立ち上がっていただくようにすることが何よりも肝心なことだと自分に言い聞かせました。

被災者に寄り添わない、新自由主義的思想を持った知事だと批判されても自信を持って行動できたのはこの本のおかげです。

塾主の本は非常に平易で当たり前のことが書かれてありますので、順調にいついitるときは頭に残りません。しかし、苦しい時悩んだ時には本当に大きな示唆を与えてくれます。

是非、皆さんもこれから思い悩んだ時は塾主の本を手に取り正しい道を歩んでください。

多くの政治家を松下政経塾は輩出し、総理大臣まで出たのに日本は何も変わっていない。いや、それどころか悪くなっています。

きっと塾主はあの世で泣いておられるでしょう。どうか同じ塾員として力を合わせて塾主がお考えになった日本を創ってまいりましょう！皆さんとなら一緒にやれると思います。頑張ってください。

皆さんの今後のご活躍を祈念しお祝いの挨拶にいたします。本日はおめでとうございます！



大谷 明

(茨城県ひたちなか市長／第 29 期)



松下政経塾、第 38 期生の皆様 ご卒塾おめでとうございます。第 29 期生、ひたちなか市長の大谷明です。私は皆さんの入塾選考の審査員をさせていただきました。また、「素志発表会」のコメンテーターもいたしました。さらには、皆さん個人個人とも、それぞれのタイミングで関わらせていただきました。ということで、私にとってはとくに思い入れのある皆さんの卒塾、感慨深いものがあります。

私自身は、卒塾からこの 3 月で丸 10 年になります。2011 年 3 月 12 日が卒塾式でありました。しかし、前日に東日本大震災が発災。当時、県議会議員となっていました私は、災害対応にあたるため欠席いたしました。そのあとも、この 10 年間振り返って、いろんなことがありました。嬉しいことも大変なことも様々です。

そんなときに、ふと口をついて出てくるのが「五誓」です。繰り返し、繰り返し、そのとき、そのときの心情に合わせて、「五誓」の各フレーズが出てきます。その中でも一番出てくるのは、最初の「一、素志貫徹の事」でしょうかね。「常に志を抱きつつ懸命に為すべきを為すならば、いかなる困難に会うとも道は必ず開けてくる。成功の要諦は、成功するまで続けるところにある。」

この言葉にどんなに励まされ、また自分を見つめ直したことがわかりません。厳しい状況の中では、道は必ず開けてくるといっても、先のことはわからないので不安の中でつぶやくことも多かったですね。ですので、私がとくに心を込めて繰り返すのは、「常に志を抱きつつ懸命に為すべきを為す」この言葉です。これは自分自身でできることじゃないでしょうか。志を抱いているのか、為すべきを為しているのか。いまでも自分自身に問い続ける毎日です。

皆さんにとって松下政経塾は、どんな場所だったでしょうか？ 自分の一部として、何が育ち、何が残るのか。それがわかるのはたぶん、これから何年か先のことなんでしょうね。38 期の皆さん、卒塾後も松下政経塾で仲間と共に磨いた志をさらに磨き、懸命に為すべきを為していただきたいと思います。そして私とも変わらず、おつき合いをいただければ嬉しいです。また会いましょう。おめでとうございます。



式典前の記念撮影

卒塾生決意表明



さわだ たくと
澤田 拓人 (38期生)



38期生の澤田拓人です。4年もの間、皆様には多大なるご指導賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

私もいよいよ卒塾を迎え、志の貫徹の為に実践に臨むことになりました。松下幸之助塾主の遺志を受け継ぎ、新しい人間観に基づく政治・経営の理念を示して、PHPの実現へ向け奮励努力する所存です。

在塾期間中は多くの問題に直面し、苦悩と挫折を繰り返した日々の中で、皆様の温かいお言葉に励ましていただいたこと、誠に御礼申し上げます。卒塾後は、人が生き活きと活動し、幸せを享受し合える経営の修行に邁進します。皆様から賜りましたご恩と温かさを、これからは実践を通じて社会にお返ししてまいります。これからもご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



しげおか しん
重岡 晋 (38期生)

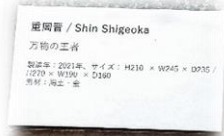


4年間、誠にありがとうございました。初めて松下政経塾の門をくぐった日をいま感慨深く思い返します。以来、実に多くの貴重な経験をさせていただきました。これも全て、塾生生活の中で支えてくださった皆さまのおかげです。研修を通じて、自身のテーマである文化芸術分野に限らず、政治・経営・

外交など様々な分野でご活躍の方々とお話をさせていただいた時間は、高く広い視野を持つ事の大切さに気づかせ成長させてくれました。人間とは何か、経営とは何か、ビジョンとは何か、自分とは何か、多くの問いを考えるが故に時に悩む時間もありました。しかし、決められた未来のないこれからの時代だからこそ、考え、議論し、自己を鑑みる深遠な問いと向き合う時間がとても重要であると切に感じます。この4年間で培った経験、ご縁を大切に、今後も自身の活動を通じて、真に豊かな社会の構築に向け進んで参ります。今後とも引き続きご指導ご鞭撻の程、お願いいたします。



研修棟入ってすぐのところに
展示しております
(期間限定展示~4/3)



卒塾に当たり、作品の制作を手掛けた重岡塾生。作品に込められた想い、制作過程でのエピソードを語って下さいました。

『タイトル:万物の王者』

私が入塾した際、松下幸之助塾主の経営理念を学ばせて頂く中で、「人間は万物の王者」という「新しい人間観の提唱」の文章に衝撃を受けました。その言葉は心に留まり、卒塾の節目にあたって自分なりの答えを、東京藝術大学で学んだ彫刻で表現しようと思い至りました。

洋の東西を問わず「人間」という命題は、古代から藝術の中心でもあります。これまでの生活や価値観が変化の渦中にある現代、この根源的なテーマが改めて問われているように思います。

人間は永遠の繁栄を渴望する一方、いずれその姿形は消滅する定にあります。生と死。光と影。創造と破壊。両義性を併せ持ち、変わり続けていく、それが生成発展なのではないでしょうか。

新しい時代、私たちはどう生き、何を残すのか？人間は万物の王者たり得るのか？現代においてリーダーとは何者か？作品を鑑賞頂いた折には、この様な問いを皆さんと対話したいと思っております。

素材には陶土、金を用いていますので、その性質上、彫刻は数千年以上先まで残すことができます。1000年後の未来の人間がもしこの作品を見たらどう思うのでしょうか？人類普遍の問いを同じく感じるのか、過去の遺物と見るのか、想像は無限に広がります。不朽のメッセージを伝える一つの手段として今後も藝術創造を行って参りたいと思う次第です。



たかはし なり
高橋 菜里 (38 期生)



松下政経塾の研修におきまして、お世話になりました全ての皆様に感謝申し上げます。4 年という月日は本当にあっという間であり、自分の志と向き合い、自問自答する日々でした。悩み、迷い、もがき、苦しみ、紆余曲折した時期もありましたが、考え続けたあの時間があったからこそ、いまの自分に辿り着くことができました。松下政経塾という恵まれた環境でのかけがえのない学びは、私にとって一生の財産です。

卒塾後は、「予防食学」を広める管理栄養士として、食から育む健康な未来の実現に向けて邁進していきます。これからもいただいたご恩を社会にお返しできる人間になれるよう頑張ります。今後とも、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

予防食学を広める WEB サイト『しょくすり』:<https://shokusuri.jp>



ば ば ゆうき
馬場 雄基 (38 期生)



4 年間における様々な研修・活動におきまして、お世話になりました先輩、職員、全ての関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

地盤・看板・鞆のない私が、志一つで入塾してから故郷福島のためにとがむしゃらに努力し続けてくることができたのも、厳しくも暖かなご指導をくださった皆さまのお陰であることを、改めて感じているところです。

台風 19 号、新型コロナウイルスの感染拡大、福島県沖地震など、数多くの課題に現場で直面し、その都度チームの皆の力を結集して挑んできました。

地域の疲弊は加速し、自然災害はいつ起こるかわかりません。だからこそ、何度でも立ち上がる、人の力で復興できる力強いまちづくりを実現していかななくてはなりません。私は、コミュニティ施設の事業責任者として現場で挑戦し、そこで解決できなかったことを政治家として実現する覚悟です。今後とも、引き続きのご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い致します。

HP:<https://yuki-baba.jp/>

研修先「アオウゼ」の動画サイト:https://www.youtube.com/channel/UCN7tpW0_uYdKFD_gTTh89wQ



まつき かりん
松木 香凜 (38 期生) 2020 年 5 月 17 日付 早期修了



先輩方、職員の皆様、全ての関係者の方々、大変お世話になりました。院卒の、就業経験もなく、伝手もない私が様々な立場の方々にお会いする機会を得られ、ご指導を受けることができたことに、感謝いたします。

入塾審査の時に「君はふらっと来たから、本当に入ってくるのか。」と妙に心配していただいたのが昨日のこのことです。

在塾した約 3 年半は私の人生において悩むことが多くありましたが、「大忍」を知ったことで学びの多い充実した時間を過ごすことができました。これからもジェンダーをはじめとした社会規範を問い直し、「誰にとってもよりよく、人生の選択肢を諦めることのない社会」を目指して頑張っていります。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

